

平成 22 年度第 4 回札幌文化芸術円卓会議の発言要旨

平成 23 年 3 月 11 日 市民文化課

平成 21 年度及び 22 年度の 2 年間に渡る今期委員会の活動内容について、佐々木委員長から報告をいただき、その後、委員と市長との意見交換を行った。

主な意見は以下のとおり。

【活動報告】

- 市長に報告書をお渡しし、内容について説明させていただく。(佐々木)
説明は省略。活動報告書については別添資料参照

【意見交換】

- こういった施策はいろいろな自治体が作っているが、アーティストのことに
ついてしっかりと記載されているものは少ない。いろいろな良い取り組みに
ついて記載されていても肝心のアーティストについて記載されておらず、ア
ーティストは他から連れてくるものという意識が強い。今回の報告書では、
アーティストのことが行政の施策の中にしっかりと盛り込まれているのが
良い。アーティストを社会の中で、自分たちで育てていかなければならない。
(中津)
- コミュニティの変化について記載してもらった。平田オリザ氏がおっしゃっ
ていたように、商店街や町内会を集めて社会包摂につなげるために一つの役
割を担えるのではないか。(斎藤)
- 文化政策は誘導的な政策になじむのかということがある。やはり、芸術文化
というのは人間の活路だから自由が一番大事。例えば、演劇の世界では、人
間の本質に根ざした生き方を主張して、それと合わない環境があればこそ、
より先鋭で新しいものが出てくると思う。それをウエルカムなものとして育
てていこうと思うととんでもないことになってしまうのではないかと思う。
(市長)
- 作品そのものに関して、どのような作品をつくるかというのは、行政ではな

くアーティスト自身に懸かっていること。ただ、それを社会の中でどのように管理してどのように使っていくかは、知恵を絞り施策としてやっていけることではないか。(斎藤)

- 今、市長は非常に謙虚におっしゃったが、大事な問題だと思う。日本において、自治体の文化行政が真剣に考えられたのはここ 30 年のこと。他の一般行政の明治時代からの 150 年の歴史と比較すると大きな差がある。文化行政が誕生した時は、自治体が文化芸術に関わることがおこがましいことではないかという議論があった。行政は芸術に対して支援すべきことと触れてはいけないことを明確に分離して仕事をすべきだというのが第一次文化行政の総括だと思う。それは今も有効であり、行政という権力を持っているところが芸術という自由を大切にすると分野に対し、やってはいけないことと、やってあげなければいけないことがある。行政として市民の芸術を保障するための基盤整備をしてあげなければならない。(蔵)

- その通りだと思う。よくハコモノというが、札幌市の場合は、板垣市長の 3 期目くらいまでに生活していくための基盤整備が終わった。4 期目 5 期目の頃に「これからは、心の豊かさだ。」と様々な文化施設の構想が立ち、それを着実に実行したのが桂市長の時代。キタラや札幌ドームの様にいろんなところでパフォーマンスができる施設をつくってきた。行政としては、そういった施設を建設し、文化をつくるための舞台設定をしてきた。私の時代は、それを使いこなして、市民とアーティストがソフトを練り上げていく時代になったのだと感じている。

たとえば、PMF にしても札幌交響楽団にしても本来は市民が支援していくものだが、それだけではとても成り立たない。ファイターズがドームで 4 万人の観客の前でプレーするのと、満員でも 2,000 人しか入らないコンサートホールで演奏会を 1 回やるのとでは違い、演劇はさらに少なく、多くても 200 人程度のところでやる仕事は、全く違う。入ってくるお金が違うから、やはり、文化行政がテコ入れしてやらなければならない。

文化行政でお金をどのように使うかという合意を取りつけるため、文化的価値を市民に理解してもらうにはどうすればよいかというのが非常に難しい。総花的になっているというのは、どうしてあそこだけと批判を受けないようにするために理由があつてのことなのかなと思っている。(市長)

- 総花的になっているという批判については、一つ一つ手を付けるものという目先のことではなく、例えば、どうしてそこだけと言わせないようにする

ためにはどうするかという、少し先のことであると思う。演劇の分野で言わせてもらおうと、自分のところの劇場は90席なので、4万人の所と比べると、入ってくるものも違うし、提供できるものにも差がある。

例えば、私たちは100人の演劇人が活動できる街を目指したプロジェクトをやっているが、役者だけではなく、演出家やプロデューサー、スタッフを成り立たせていくためにはどうしたらよいか。すぐにはできないが5年後10年後にできるようにするにはどうすればよいか。本州や海外で活動して成立させるためにどういった仕掛けをつくるか、ということを考えるのが重要だと思う。同じような仕組みや同じような支援では全く成り立たないものであるから、全く違う方向からのアプローチで考えていかなければならない。その成り立ち方は、それぞれのジャンルの人たちが考えるべきことであり、行政の方にどうしてどうしてと聞くだけでなく自分たちも真剣に提案していかなければいけない。(阿部)

- 市長のおっしゃっていた文化行政の市民への理解や、どういった指針を示すかということが難しいという話だったが、そこがずっとわかりにくかったことが総花的であるという結果につながっていたと思う。2年間の会議の中で最初に出てきたのが、役所として止むを得ないことだが、文化行政を担う担当の方がどんどん入れ替わってしまって、せっかくいいものを作り上げて引き継がれていけないという点がある。そういう部分も踏まえ、すぐにでもできるものを提案した。(早川)
- 一つの舞台芸術をつくるのには大変な労力があることなのに、その経過が全く残っていないのは非常にもったいないことだと思う。舞台を見た人たちが、心に刻んで伝えていくものだという考えもあるが、それだけではもったいない。(市長)
- アーティストは自由を担保されたうえで創造活動していくというのが好例だが、それを常に期待しているだけでは、突発的な天才が現れるのを待つだけである。(早川)
- そこにいけばこの街で今何をしているかがわかるというように、どこで何をしているかを案内するのは大切なこと。それはすぐに着手したい。それから、過去のデータについてはアートセンターの中でデータベース化していくことが一つの事業になると思う。(市長)

- 先ほど市長が税金の分配について市民の合意をどうするかという話をしていたが、それは非常に難しいと思った。雪まつりのときに韓国の大田市から100名ほど来たが、その時に歌舞団の方が4人いて、国際プラザで是非日本の伝統芸術をやっている人と交流をしたいということになり、プラザから言われて自分たちも演奏した。意見交換させてもらったときに向こうからは30代の歌舞団の方々が来た。私は60代だが色々な話をした。やはり、韓国でも伝統芸能などは市民ではなかなか支えられないので、大田市では65名の歌舞団を抱えていると聞いた。それにより、若いアーティストたちは生活が安定し、非常にレベルが高い。今では、ヨーロッパやアジアでコンサートを行っている。大田市は韓国で5番目の都市であり、札幌も日本で5番目の都市であるから、このような縁組みができたのだと思う。大田市ではどのようにして莫大な予算の市民合意を得られているのか。これから交流が始まるのでその辺について市長に探っていただきたい。その中でできることを札幌で実現していただきたいと思う。(中島)
- 伝統芸術は割と分かりやすい。新しいものは、市民合意など全く関係ないからこそ生まれてくるのだろうし、それを理解しろと言ってもなかなか難しいと思う。頭の中でうまく整理できない問題がいろいろ出てくるが、今回の報告書により、それをうまく図式化していただいたと思う。(市長)
- この報告書はある意味画期的だと思う。これまで文化行政というと、助成がメインであった。ところが、自治体のお金もなくなってきている。それを踏まえ、助成システムに代わる「芸術の産業化」はとても大胆な提言だと思う。つまり、文化芸術は大事なものだから社会的財としてどのように流通させるかということ。今までとは別の枠組みである。おそらく、創造都市さっぽろにも通じるところがある。ただ、これを実際に作っていくのは非常に大変なこと。その基礎作業はできたので方向付けをしていただければと思う。(大平)
- 文化にお金を使うことや芸術の産業化に関し、市民に対して説明するには、文化が経済を兼務するということだと思う。いろいろな文化芸術を大切にしているというブランドをつくっていくことが、札幌に対する価値を上げていくことになる。同じものをつくるのでも文化芸術を大切にしている街とそうでない街でつくられるものには差が出てくると思う。明確な根拠はないが、人間の営みとはそんなものであるという気がする。(市長)